



女性学研究資料室の報告と総括

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田川, 建三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005001

女性学研究資料室の報告と総括

本学女性学研究資料室は今年度限りで閉鎖される。この機会に、研究資料室の簡単な歴史と活動の報告をしておきたい。(文中すべて敬称略)

1. これまでの流れ

A. 研究資料室の発足

女性学研究資料室は1990年度に発足した。これは、それまで一般教育科目「女性論」を共同で担ってきた教員の組織(女性論講座委員会)が、単に授業を担当するだけでなく、共同の研究活動を行なっていくことを目指して発足したものである。当時学長であった片桐洋一の発案であり、またその御尽力により成立したものである。また、出発当時室長として実際の基礎を据えたのは、藤江喜美子であった(1994年3月定年退職)。

もちろん、それまでの女性論講座委員会も単に授業を行なうだけの組織ではなく、図書の購入などの実務も負担し、他方、相互の討論によるさまざまな研究上の認識の進化がはかられた。その成果は、講座委員会としては公表していないが、個々のメンバーが学会発表、著作・論文等の文書による発表、全国各地に出向いてのさまざまな講演、大阪を中心とした諸自治体の女性政策への協力等々の形で、大幅に社会的に公表されている。

それをもう一歩進めて、メンバーが共同の研究上の仕事にあたるべく、研究資料室という名前で組織と仕事を強化することになった。

メンバーの互選によって選ばれる室長は、はじめ4年間(1990年度より1993年度)は藤江喜美子、その退職後は、現在まで田川建三がつとめてきた。

なお「女性論」講座については、本誌第1号に詳しく述べたので、ここでは繰り返さない。現在は教養科目「女性学」と名称を変えている。

B. 研究資料室の構成員

それまでの女性論講座委員がそのまま資料室員として室の運営を担うこ

とになった。出発当初8名、その後1、2名の交替はあったが、現在も8名で運営されている。

かつての講座委員は、大学の専任教員の中で、みずから積極的に女性学を志す者が集って構成された。その構成員は、大学の授業に関わる仕事であるから、一般教育委員会によって公的に認定されている。研究資料室に組織が変わるにあたり、大学教授会のもとに研究資料室運営委員会が設置された。運営委員会は研究資料室の予算、運営の基本方針を定め、将来計画を審議することを目的とした。また、以後、資料室の構成員の変更はこの委員会に報告、決定されることとなった。

研究資料室そのもののほかに研究資料室運営委員会が存在することは一種の二重組織で、しばしば非常に不便であったが（同じ報告・審議を両者で行なわなければならない）、研究資料室の運営を女性学にたずさわらない大学の他のすべての構成員に伝えるためにも必要な組織であり、また、予算の基本の枠組み、事業の基本的な設定等、大学全体の構造を考慮した上で決めるべきことについても、当然、大学の常置委員会の一つとして運営委員会が作用することが必要であった。

手続き上はこのようになっているが、女性論講座の出発点から、みずから積極的に女性学に志す教員が集って講座委員会（ないし研究資料室）を構成する、という基本は一貫していた。そしてこれが、本学の女性学のいとなみを社会的に存在意義のあるものとせしめた非常に重要な要因であった。女性学は、みずから女性学に積極的に志す者しか、なすことはできない。女性学は、女性差別撤廃のための学である。この社会のあらゆる部分、あらゆる側面に遍在しており、従来の伝統的な諸学問の基盤をも形成している女性差別をなくすためのいとなみなのである。すなわち、大学の中の女性学は、従来の女性差別原理にのっとった伝統的なすべての学問に対する批判的な対峙の意識によって支えられる。その意識なしに、単に大学の教員であるというだけで、交代制で順に「女性問題」の授業を担うとすれば、それは従来の女性差別の社会体制の中に女性を位置づけるという作用しか果たさない。

研究資料室は大学の公的な機関であるが、その構成員の仕事には直接的

な見返りは一切ない。下記の事業については多少の実行予算がついたけれども、その執行のためには多大な労力を必要とする。それはいわば完全なただ働き、いやそれ以上にしばしばみずからかなりの負担を強いられた。各構成員はそれぞれ自分の属する学科の教員としての責任を100%果たした上で、さらに女性学の仕事をしているので、非常に大きな労働負担となる。一、二年のことならたいしたことではないが、「女性論」講座発足以来(1982年度)ずっとそういう形で仕事を続けることができたのは、各人が自発的に相当な犠牲を払うことを喜んでなしてきたからである。確かに、社会を変えていくための作業は、従来の制度の枠組みの中で保証された仕事だけをこなしては不可能であるので、これは当然のことにはちがいないが。

C. 研究資料室の事業

講座委員会の仕事をすべて継承するとともに、新たな事業がいくつかつけ加わった。従来の仕事は主として(1)「女性論(学)」の授業とそれに伴う公開講座の運営、(2) 図書の購入、の二つであったが、これに更に、(3) 図書目録の発行、(4) 研究雑誌の刊行、(5) 研究コロキウム及び(6) 特別講演会の実施、が加わった。

(1) 女性学の授業と公開講座(授業公開講座、府民教養講座)については、本誌第1号参照。

(2) 図書の購入は、当初、図書購入費50万円(うち外国語の研究雑誌購入費12万円)の予算がついた。途中から研究雑誌購入費予算は削られたが、他から動かしうる予算により同額の購入を続けた。結果において、図書購入費全体の額は、年度により多少変動はあったものの、ほぼこの額で続いてきた。しかしこの金額では、学生も多く利用する一般的な日本語図書の購入に大部分を割くので、それ以上の水準の研究図書の購入は非常に限られた。

(3) 女性論講座発足以前から本学に存在した女性学関連図書、および女性論講座ないし研究資料室予算で購入したすべての図書の目録を発行した。第1集(1990年度発行)、第2集(1992年度発行)の2回発行されている。

(4) 本誌『女性学研究』の発行。第1号(1991年度発行)の時は隔年発行の予定であったが、第2号(1993年度)より毎年発行され、本第4号にいたっている。

(5) 研究コロキウム。年に2回、そのつど原則として学外講師1人、学内研究員1人による発表を中心に、丸1日かけてそのテーマをめぐり討論する。その成果は毎回本誌に公表する。1993年度より今年度まで、毎年実行。詳しくは、本誌の各号参照。

(6) 特別講演会。それまで一般市民むけの公開講座としては、授業公開講座(女性論の授業のすべてを比較的少数の市民に公開する)、及び府民教養講座(その授業のうち学外講師担当の講演会の部分にのみ参加する)、の2種類の公開講座が行なわれてきたが、研究資料室成立後は、それに加えて、特別講演会を年に一度冬に実行した。これは、本学の上記2種類の公開講座に限らず、一般的に公共機関の行なう市民むけの講座は入門的なものに限られることを考慮し、今後はそれとは別に、そういった講座をすでにある程度聞いたことのある人々を主たる対象とした、やや程度の高い講演会が必要とされるようになってきた事態に対応するためである。この水準の講演会は、本学に限らず、今後多く実行されることが望まれよう。1993年度より今年度までで3回実行した。はじめ2回の講師は、清野博子(読売新聞)、畑律江(毎日新聞)であった(今年度については後述)。

2. 今年度の事業

今年度の構成員は、田中文英、ラマール・クリスティーン(国文学科)、田川建三、萩原弘子(英文学科)、木村涼子、谷村覚(人間関係学科)、鈴木綾子(基礎理学科)、熊安貴美江(体育研究室)の8名である(学科順、学科の中はアイウエオ順)。

今年度の事業のうち、主なものは下記の通りである。

(1) 「女性学」の授業と公開講座。本学専任教員である上記8名の資料室員が授業を担当するほかに、年間10回の公開講演を授業と結びつけて行ない、この部分を学外講師に委嘱した。

学外講師（括弧内は講演テーマ）は、坂田伸子（性暴力とは）、岡真理（イスラム世界の女性、2回）、竹中恵美子（女性と労働、2回）、朴美津子（従軍慰安婦「問題」とはどのような問題か）、養父知美（戸籍、国籍、結婚に関連の法律と女性）、尼川洋子（女性学の本）、内藤和美（女性に求められるケア役割を考える、2回）であった。

公開講座として参加した市民は、年度はじめにおいて、授業公開講座18名、府民教養講座36名であった。申込みは非常に多数であったが、学生の受講者との人数上のバランスをとるために、抽選によりこの人数にしぼった。

(2) 図書の購入

(3) 研究雑誌（本号）の刊行

(4) 研究コロキウム（詳しくは本号の別頁参照）。

第1回、12月2日。発表者：ブラウン浜野・シルビア（学外講師）、ラマール・クリスティーソン（資料室員）。

第2回、12月22日。発表者：内藤和美、服部範子（いずれも学外講師）。

(5) 特別講演会。2月10日、講師・國信潤子、「第4回世界女性会議からわたしたちは何を得たか」。参加者約100名。

以上、「女性学」講座、研究コロキウム、特別講演会の講師を引き受けて下さった学外講師の方々に、ここにあらためてその労を感謝したい。

以上の活動をもって、本学女性学研究資料室は終る。歴史のあるものは、必ず終る時が来る、ということか。

田川 建三